



Title	日本語と中国語の慣用句に関する一考察：慣用句構成語の比較を中心に
Author(s)	桂, 小蘭
Citation	大阪大学言語文化学. 1992, 1, p. 93-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78203
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語と中国語の慣用句に関する一考察

—慣用句構成語の比較を中心に—*

桂 小蘭**

本文以宮地裕先生の「慣用句一覽」和徐宗才・應俊玲兩先生の『慣用語例釋』為比較材料、對日語的慣用語和漢語的慣用語的構詞進行了考察。在考察中注意到、漢語的慣用語有不少是由動物名稱構成的。既有“狗”、“牛”等家畜、也有“虎”、“猴”等野生動物。還有想像中的動物“龍”。在意義上、這類慣用語多屬貶義、其中又以諷罵的居多。如“母老虎”、“癩皮狗”等。幾乎沒有褒義的。這是漢語動物慣用語的一大特色。相比較之下、日語里使用動物名稱的慣用語不多、且多以昆蟲和鳥類為主。在意義上、除貶義以外、褒義和不褒不貶的也很多。尽管日語中也有象“猫をかぶる”(裝老實)這樣表示貶義的慣用語、但其貶的程度遠遠不如漢語。筆者認為、上述的這些差異是由日中兩國的自然地理條件和文化歷史背景的不同而造成的。值得一提的是、日語中雖有很多魚類詞匯、但慣用語里却使用得很少。

日語慣用語在構詞上的最大特色則是使用身體部位名稱的極多、占了三分之一、而漢語慣用語中却相對較少、只占百分之十三。但這並不意味漢語中這類表現就少、而是由於這類表現在漢語中大多屬於一般的語言表現形式、如“嘴壞”、“嘴損”、“黑心”等。而在日語中它們都屬慣用語。除慣用語之外、漢語的其他熟語(成語、諺語等)中也有不少使用身體部位名稱的。大概是因為漢語的這些語言形式廣泛地使用了身體部位名稱、所以、偶然地影響了它以慣用語的形式出現。此外、日語的慣用語中、還有不少是從漢語的成語轉化來的。如“一糸乱れず”(一絲不亂)、“寢食を忘れる”(廢寢忘食)等。還有不少慣用語在構詞上和意義上都和成語相同。如“脇目もふらず”(目不斜視)、“手をこまねく”(袖手旁觀)等。這說明日語的慣用語和漢語的成語有著極為密切的關聯。

* 日中慣用句一考 —比較慣用語的構詞— (桂 小蘭)

** 言語文化研究科博士後期課程

1 はじめに

どの言葉にも、慣用句はいきいきとした簡潔な言語表現形式として存在し、人の目を引く。外国人の学習者にとって、慣用句は新鮮な感じがするものであると同時に、わずらわしいものでもある。ある意味から言えば、慣用句の持つイメージ性と比喩性の理解の課程は異文化の理解の過程でもある。本稿の目的は、日本語と中国語の慣用句の比較を通して両者の慣用句の構成語および意味における特徴を明らかにすることである。

日本語の「慣用句」という言葉は中国語では「慣用語」になる。中国語の「慣用語」は日本語の「慣用語」と異なるところのある概念であるが、混乱を起こさないために、中国語の慣用語も日本語の「慣用句」という呼び方で統一することにする。

慣用句に関する研究が盛んになったのは、日本では七十年代の後半、中国では八十年代に入ってからのことである。日本の場合、白石大二氏の『国語慣用句大辞典』(1977)をはじめ、宮地裕氏の『慣用句の意味と用法』(1982)などが世に出た。中国で馬国凡・高歌東両氏の『慣用語』(1983)、さらに徐宗才・應俊玲両氏の『慣用語例釈』(1985)などが出版された。このように慣用句に関する研究は一定の進展を見せているものの、語彙・語法などの他の分野に比べ、遅れているところも多い。慣用句の基本定義・選定基準および他の慣用表現(日本語では諺・連語・句等、中国語では故事成語・諺語等)との区別においては、未解決の問題がまだ多く、研究者により持論がずいぶん異なり、時に真っ向から対立するものも見られる。こうした未解決の課題がまだたくさん残されている現状では、全般に日本語と中国語の慣用句の比較を行うのは至難の作業であり、かつ不偏の結論は得がたい。そこで、本稿では、日本語と中国語の慣用句の構成語における一つの特徴と考えられる動物名称および身体部位名称を含む慣用句を取り上げ、両者の相似・相違を比較しながら考察する。

比較に使う材料は日本語では『慣用句の意味と用法』に付録として付いている「慣用句一覧」、中国語では『慣用語例釈』とする。

2 動物名称を含む慣用句の比較

「慣用句一覧」から拾ってみると次のようなものが掲載されている。

虫がいい 虫が好かない 猫の額のように 猫をかぶる 馬が合う
 うなぎの寝どこ 鵜の目鷹の目 蚊の鳴くよう 牛の歩み 雀の涙
 蟻の這いでる隙間もない 狐につままれる 犬猿の仲 袋のねずみ
 蜂の巣をつついたよう 飛ぶ鳥を落とすいきおい

『慣用語例釈』から拾ってみると次のようなものがある。

打落水狗 狗腿子 癩皮狗 拍馬屁 馬後炮 驢年馬月
 笑面虎 母老虎 閹牛棚 鉄公鷄 寄生虫 放鴨子 一窩蜂
 一条龍 地頭蛇 拾臭魚 替罪羊 解剖麻雀 猴年馬月 吃蒼蠅

動物名称の慣用語における具体的な使用ぶりがわかりやすいように表にまとめた。

日本語		中国語	
動物名称	慣用語の数	動物名称	慣用語の数
虫 ¹⁾	7	狗○	10
猫	4	虎	6
馬○	3	馬○	6
鳥	3	牛○	3
鵜	1	鷄	3
鷹	1	羊	3
雀○	1	虫○	3
蚊	1	鴨	2
鼠	1	蜂○	2
蟻	1	驢	1

次のページに続く

¹⁾「○」の付いてるものは日本語と中国語両方に用いられるもの

日本語		中国語	
動物名称	慣用句の数	動物名称	慣用句の数
蜂○	1	猴○	1
狐○	1	狐○	1
猿○	1	狸	1
牛○	1	龍	1
犬○	1	蛇	1
鰻	1	麻雀○	1
		蒼蠅	1
		魚	1
合計 16	27	合計 18	47

以上の表からわかるように、日本語の慣用句に用いられている動物名称は16種あり、それらの名称を含む慣用句は合わせて27句あり、全体の2パーセントほどを占めている。それに対して、中国語の慣用句に用いられている動物名称は18種あり、それらの名称を含む慣用句は合わせて46句あり、全体の9パーセントほどを占めている。また、日本語と中国語の両方に使われている動物は「虫」・「馬」・「牛」・「狗」(犬)・「猴」(猿)・「狐」・「蜂」・「雀」などがあり、日本語にのみ用いられているのは「猫」・「鳥」・「鷹」・「鷄」・「蚊」・「蟻」・「鼠」・「鰻」などがあり、中国語にしか使われていないものとしては「虎」・「龍」・「狸」・「鷄」・「鴨」・「羊」・「驢」・「蛇」・「蠅」・「魚」などがある。中国語の慣用句の上位にある「狗」(犬)は日本語では下位にあり、逆に日本語の上位に上がっている「虫」は中国語では中位にある。なお、動物の種類については、中国語では、家畜類と野生動物類が多いのに対し、日本語では、昆虫類と鳥類が中心となっている。不思議なことだが、日本語には、魚に関する語彙がとても豊富だと言われているが、「慣用句一覧」には「うなぎの寝どこ」以外は、あまり見られない。

日本語の動物名称を含む慣用句には、「猫をかぶる」、「虫が好かぬ」のようなマイナス評価のものもあれば、「飛ぶ鳥を落とす勢い」、「馬が合う」、「蟻の這いでる隙間もない」などのようなプラス評価あるいは普通の意味のものもあるが、だいたい対等の比重を占めている。しかし、中国語の動物名称を含む慣用句にはマイナス評価のものが多数を占めている。プラス評価あるいは普通の意味のものはわずか4、5句(「老黄牛」・「放鴨子」等)ほどである。しかもマイナス評価の慣

用句には罵倒語やきつい表現が少なくない。たとえば、凶悍な女は「母老虎」（雌虎）、卑怯な人は「癩皮狗」（黄癩が肌にできている犬）、付和雷同的な人は「応声虫」にそれぞれたとえられている。慣用句に限らず他の動物名称を含む言語表現にも罵倒語やきつい言葉は少なくない。たとえば、「狼心狗肺」「人面獸心」「肥猪」などの故事成語または単語は動物名称を使って人をののしる言葉である。日本語にも「馬面」、「さめ肌」、「犬畜生」などのような動物名称を使って人をののしる罵り言葉があるが、中国語に比べてだいぶ少ない。

これらの違いはおそらく日中両国の自然地理条件および文化歴史背景の違いによるものだろう。中国は大陸国であり、雄大な国土を有する。動物の種類が多く、虎の主な生息地である。世界的に虎が絶滅に瀕している今日でも、中国の東北と華南地域にまだ残っている。龍は中国では想像上の大きな動物であり、鳳、麟、亀とともに四霊の一つである。中国では龍虎は共に力量と権威の象徴とされており、大陸の中国人にせよ、海外の中国人にせよ「龍的伝人」（龍の子）と自称する。民間には男の子に龍または虎の字を用いて名付けする習慣がある。つまり、龍と虎のようにたくましく育てほしいという願いが込められているのである。一方、虎はまた凶暴の象徴ともされる。孔子の名句「苛政猛於虎」は封建時代の政治の残虐さを虎にたとえたものである。また、牛・馬・驢馬・狗・鶏・鴨などの家畜も中国人の生活に密着しているものである。中国の農村には、今でも驢馬、馬および牛などを運輸の道具または労役に使うところがある。鶏や鴨は伝統的に食用のため飼われる。犬は用心のために飼われるが、食用のために飼われるところもある。日本でも親しまれている貴重な漢方薬には動物の骨、皮および内臓で作られるものが多い。飲食生活においては、豚肉、鶏肉のみならず、牛肉、羊肉および狗肉なども食用する。このような生活環境に置かれた中国人は長年の生活実践を通じて動物の習性および生理上の特徴を学び、動物に関する生活上の知恵も育ててきた。このように中国人にとって、動物はあくまでも人間に命令されて労役に使われたり、人間の食生活を豊にする以外のなにものでもない。言い換えれば、人間は至高無上のものであり、動物は劣等なものでいわゆる畜生である。そこに永遠に越えられない歴然たる線が引かれている。これは中国人の伝統的な動物観ではなかろうか。

それに対して、日本は島国であり、動物の種類が少ない。虎などのような大陸に生息している野生動物にはなじみが薄い。そのかわりに、鳥や猫または海の動物になじみが深く親しみを持っている。日本は魚の種類がとても豊富だと言われ

ているが、あまり豊富なため、かえって他の動物に対する関心度が低められたのではなかろうか。日本の神話物語に登場する人物も大旨魚類を中心とする海のものから化けたものである。なお、食生活においては米、魚および野菜が中心となっている。肉類は豚肉と鶏肉ぐらいで、狗肉や羊肉はもちろんのこと、牛肉さえ食用する習慣はもともとはなかった。日本人にとって、狗肉は「気持ちが悪い」とか「想像にもつかない」とされている。日本人は魚類以外に植物類に対する関心も高く、知識が豊富である。このような自然条件と生活環境に置かれた日本人は事物に対する細かい感覚を育ててきた。

中国は多民族の国である。古代から現代にわたって、漢民族と各少数民族との関係が長い歴史をもっている。中国の歴史には、少数民族が漢民族を征服し統治する元、清時代があった。元代と清代は中国の歴史における各民族大融合の二回の大きな時期であると言える。各民族が融合した過程で、言語、風俗習慣の違いによる各種の衝突や矛盾も生まれたことは想像に難くない。こうした社会環境におかれた中国人にとっては、外国に比べ割に少数民族の少ない日本のような「以心伝心」は通じにくい。一方、日本は海に囲まれているため、古代の遅れた交通手段は日本の外界との交流を制限した。日本人は異民族異文化との衝突をあまり経験しなかった。こうした孤立した地理環境に置かれた日本人にははっきりものを言わないあいまいさおよび非社交的な面が生まれたのではなかろうか。

3 身体部位名称を含む慣用句の比較

「慣用句一覧」と「慣用語例釈」を対照して比較した結果は次の通りである。

1. 日本語と中国語の慣用句にともに用いられている身体部位の名称（表1）
2. 日本語または中国語の慣用句にのみ使われている身体部位の名称（表2）

(表1)

日本語		中国語	
目	6 6	臉	8
手	5 4	鼻子	6
心	2 4	腦袋	5
胸	2 1	眼	5
耳	1 8	悖子	5
顔	1 6	骨頭	5
足	1 5	牙	4
腹	1 3	手	4
鼻	1 2	耳	3
肩	9	屁股	3
首	8	脊梁	3
頭	8	脚	3
齒	6	肚子	2
腰	6	嘴皮	2
舌	4	背	2
指	3	胸脯	1
背	2	指	1
骨	2	腰	1
唇	1	肩	1
尻	1	舌	1
背筋	1	心	1
踵	1	脚	1

(表2)

日本語		中国語	
口	3 3	腿	3
身	1 9	手腕	1
腕	7	眼皮	1
肝	5	氣管	1
顎	3	胎	1
腸	3		
肝	5		
瞳	2		
脛	2		
脈	2		
掌	2		
膝	2		
目玉	2		
筋	1		
腑	1		
臍	1		
喉	1		
股	1		
脇	1		
心臓	1		
目頭	1		
額	1		

以上の比較からわかるように、日本語では「目」と「手」、中国語では「臉」と「鼻」がそれぞれ一位と二位となっている。日本語の上位に上がっている「目」と「手」は中国語では共に中位にある。日本語と中国語の身体部位名称を含む慣用句には同じ発想に基づいて同じ意味を表すものがある。

身体部位名称と他の構成語がまったく同じもの

面の皮が厚い = 臉皮厚
 足を引っ張る = 拉後腿
 あげ足をとる = 找小脚

日本語には「面の皮が厚い」に反対する「面の皮が薄い」という慣用句がない。しかし、中国語では「臉皮薄」ともいえる。同じ発想からきた慣用句以外に違う発想からきたものも目立っている。たとえば、日本語の「尻を叩く」と中国語の「打屁股」とは構成語が同じで、原義も一致している。しかし、慣用句の意味が違

う。日本語の場合は、それは「励ます」「催促する」という意味を表すが、中国語の場合は「ひどく批判する」という意味を表す。

中国語の身体部位名称を伴う慣用句は日本語に比べて、数がずいぶん少ない。慣用句と並ぶもう一つの慣用表現—故事成語はどうなっているのか、『漢語成語小辞典』²⁾を調べた結果、身体部位名称を含む成語は約13%を占めており、やはり日本語より少ない。これはなぜだろうか。この点に関しては、二つのことが考えられる。

1. 中国語の慣用表現には身体部位を使って物を表現する言い方が数多く見られる。しかし、これらの言葉は慣用句とせず、普通の語句とされている。たとえば、

合口	=	口に合う	笑眯了眼	=	目を細め
臉發青	=	顔が青くなる	嘴会説	=	口がうま
青筋暴露	=	青筋を立てる	心黒	=	腹が黒い
眼圈發紅	=	目がしらが赤くなる	嘴緊	=	口がかた
說漏嘴	=	口を滑らせる、口が悪い	棘手	=	手を焼く
白眼看人	=	白い目で人を見る	心動	=	心が動く
插嘴	=	口を挟む			

のような例は枚挙に暇がない。しかし、これらの言葉は慣用句でもなく、ことわざでもない。ただ一つの語または語より長い文節である。それに対し、日本語ではそれはすべて慣用句とされている。つまり、中国語で「慣用句」、「成語」とされているものと、日本語で「慣用句」とされているものとの範囲が違うのである。

2. 現代中国語は古代中国語と違って、数多くの二音節及び多音節の語が生まれた。一部の音節の少ない慣用句がしだいに慣用句から離脱し、複合語化しつつある傾向が見られる。「勢利眼」「黒心」「狼心」「臭手」のような音節の少ない慣用句はすでに複合語になっている。

上の二点を総じてみれば、中国語の身体部位名称を持つ表現の数は日本語に劣る事がないと思える。

²⁾ 商務印書館『漢語成語小辞典』1972年

4 日本語の慣用句と中国語の故事成語

日本語の慣用句の中には中国語の故事成語から転じたものが少なくない。換言すれば、中国語では成語という言語形式であるが、日本伝来後慣用句の形に吸収され、定着したのである。

浩然之气	浩然の気	冰山一角	氷山の一角
先見之明	先見の明	晴天霹靂	青天の霹靂
付之一笑	一笑に付す	犬猿之交	犬猿の仲
目中無人	眼中にない	一絲不乱	一糸乱れず
寢食忘食	寢食を忘れる	同歸於尽	灰燼に帰する

又、同じ発想から来たものも多い。

1. 身体部位名称と意味が完全一致するもの

目不忍睹	目に余る	目不斜視	脇目もふらず
握手言和	手を握る	仰人鼻息	鼻息をうかがう
引人注目	人目を引く	屈指可数	指折り数える
袖手旁觀	手を拱ぬく		

2. 意味は似ているが、身体部位名称は一部のみ対応するもの

苦口婆心	口がすっぱくなる	推心置腹	腹を割って
翹足企首	首を長くして待つ	胆戦心驚	肝を冷やす
遮人耳目	目を盗む	毛骨悚然	身の毛もよだつ
目瞪口呆	あいた口がふさがらない		

3. 身体部位名称は違うが、同じ発想によるもの

趾高气揚	肩で風を切る	大難臨頭	足下に火が付く
心中有鬼	臍に傷を持つ	磨拳擦掌	腕がなる

以上からわかるように日本語の慣用句は発想、構成語において中国語の成語と共通するところが多い。そのほかに結びつきの度合においても相似する面は少なくない。宮地裕氏が指摘したように日本語の慣用句は語と語の結び付きが非常にかたく、活用変形及び語順の移動は自由に行えない³⁾。この現象は故事成語におい

³⁾宮地裕「慣用句の意味と用法」(明治書院) 1982 年

てもおきる。たとえば「大公無私」「不毛之地」「未老先衰」のような否定形を持つものは多いが、ほとんどの成語はその肯定形を否定形に変えて用いることはできない。日本語の慣用句は中国語の慣用句と同じ概念に属しているが、共通点が少ない。むしろ、故事成語との関わりが多いように思える。ただし、中国語の故事成語と関わりのある日本語の慣用句のなかに、一目でわかるものもあれば、そうではないものもある。そのため、どれが日本固有のものか、どれが中国語の影響を受けてできあがったものか、判断するのは難しく、さらに考察しなければならない。いずれにせよ、中国語にも日本語にも同じ発想に基づくものが多くあるのは間違いのないことである。そのため、それらの言葉を翻訳する際、他の国の言葉にない利点がある。たとえば、「目を細める」、「首を傾げる」、「手に汗を握る」は文字通りに中国語に翻訳しても、その象徴的なイメージは中国人にも理解できる。これは同じ文化パターンのおかげであるといえる。しかし、文化パターンの異なる欧米人にとっては、文字通りに訳しては通じないこともあるため、意訳するほかはない。この場合、慣用句としての独特の味はしばしば失われてしまう。たとえば、夏目漱石の『草枕』⁴⁾に「余は思わず首を傾げた」とあるが、アラン・ターニーによる英訳では、“I just did not know”となっている。しかし、果たしてただの“I did not know”は「首を傾げる」の持つ象徴性を十分に伝えられるのであろうか。そこには言葉が越えにくい文化の隔たりがみられる。

参考文献

- 宮地裕『慣用句の意味と用法』（明治書院）1982年
 白石大二『国語慣用句大辞典』（東京堂）1977年
 徐宗才 応俊玲『慣用語例釈』（北京語言学院）1985年
 商務印書館『漢語成語小辞典』1972年
 小林裕子『身ぶり言語の日英比較』（エレック選書）1987年
 馬国凡・高歌東『慣用語』（内モンゴル人民出版社）1975年

⁴岩波文庫版：43 ページ